

浄土

monthly JODO

2015
April

4



酒器

南
初枝
の作品
陶芸家

かつて酒は量り売りが一般的であった。酒屋は徳利に注いで酒を売った。徳利は個人のものではなく酒屋の貸し物であり、多くは屋号が入っていた。壺売りが主流になってから、家庭用の物が作られた。呑むための酒器は、江戸時代までは盃。宴が進み座がぐだけてくると、猪口ちごに替えたという。猪口の大きいのがぐい呑。

写真は荒々しく新聞紙に包まれてきたのを、ほどいたばかりのところという写真家の意図であろうか。カタログ然とした整然を避けて、あちこちを向いている。登り窯でしか出せない焦げたような味わいが、風趣を醸し出す逸品である。

撮影・芝崎慶三

東京・青山

善光寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



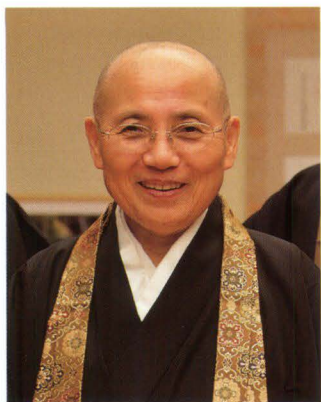
青山善光寺本堂と御忌唱導師の教書伝達式で大本山増上寺法主
八木季生台下から教書を拝受する善光寺第16世川名観恵住職。
写真左奥には青山善光寺所属の三人の尼僧さんが列席された。
(写真提供・大本山増上寺)



善光寺本尊の三尊阿弥陀如来立像



善光寺本堂内陣



大本山増上寺法主八木季生台下
から拝受した御忌唱導師委嘱状



川名親恵住職は十五歳の時、こ
の善光寺で尼僧になり約六十年
の年月が流れた

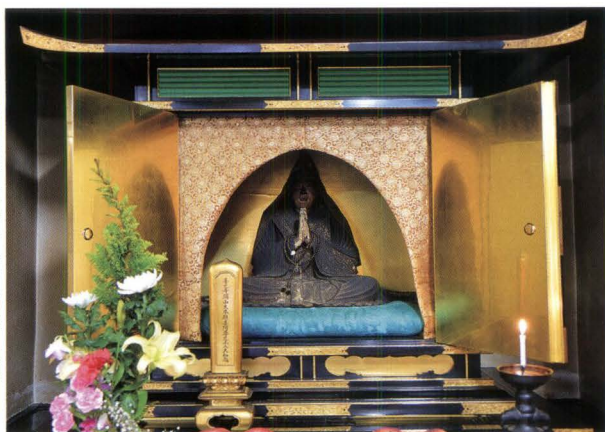


川名住職は茶道の師範でもあり、
境内奥には雰囲気溢れる茶室がある



善光寺の寺紋である立ち葵の
洒落たオブジェが目を引く

善光寺開山大本願善阿尊光上人和尚像と位牌



昭和二十四年から同六十一年まで開園されていた善光寺幼稚園の記念碑



墓苑の中央付近に歴代住職の墓が並ぶ



客殿二階の襖には善光寺ならではの菊と桐の紋が入っている

浄土

2015/4月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京 青山 善光寺	写真＝真山剛	1
連載 法然上人のお言葉①	梶村 昇 英訳 河西良治	6
滝田栄インタビュー 祈りの心を形にする（最終回）		8
寺院紀行 東京 青山 善光寺	文・撮影＝真山 剛	16
連載 響流十方	小村正孝	24
新連載 東日本大震災の被災地を訪れて	成田淳教	28
連載 会いたい人 野村萬斎さん②	関 容子	32
連載小説 渡辺海旭⑤⑦	前田和男	40
連載 誌上句会	選者＝増田河郎子	48
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	51
編集後記		52

表紙・陶芸家 南初枝の作品

表紙裏＝表紙の言葉

裏表紙裏＝仏教歳時記



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

ご法語

現世を過ぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。念仏のさまたげになりぬべくば、なになりともよろずをいといすて、これをとどむべし。いわく、ひじりで申されずば、めをもうけて申すべし。妻をもうけて申されずば、ひじりにて申すべし。住所にて申されずば、流行して申すべし。流行して申されずば、家にいて申すべし。自力の衣食にて申されずば、他人にたすけられて申すべし。他人にたすけられて申されずば、自力の衣食にて申すべし。一人して申されずば、同朋とともに申すべし。共行して申されずば、一人籠居して申すべし。衣食住の三は、念仏の助業なり。

(禅勝房伝説の詞)

Honen Shonin's Sayings

You should live in this world in such a way that you can say Namu Amida Butsu. You should not mind casting away whatever might stand in the way of you uttering the nembutsu. For example, if you cannot utter it while living secluded from society, you should be married and say it. If you cannot do so as a married person, you should utter it as a recluse. If you cannot do so at your settled residence, you should utter it while going from place to place. But if you cannot do so while traveling around, you should utter it at your residence. If you cannot do so while trying to make a living on your own, you should utter it asking for others' assistance. But if you cannot do so asking for it, you should utter it while trying to make a living by yourself. If you cannot do so alone, you should utter it together with

法然上人のお言葉

現代語訳―この世の過ごし方は、念仏の称えられるようにしなさい。念仏を申す妨げになるのであれば、なんでもすべて厭い捨てて、これを止めなさい。たとえば、隠遁しては申せないというのであれば、妻をもらって申しなさい。妻をもらっては申せないというのであれば、隠遁して申しなさい。家を構えては申せないというのであれば、各地を歩き回って申しなさい。歩き回っていては申せないというのであれば、家にいて申しなさい。自分の力で衣食を用意しては申せないというのであれば、他人に助けられて申しなさい。他人に助けられては申せないというのであれば、自分の力で衣食の用意をして申しなさい。一人では申せないというのであれば、みんなと一緒に申しなさい。みんなと一緒にでは申せないというのであれば、一人籠って申しなさい。衣食住の三つは、念仏を称えるための助けとなるものです。

解説

この世の過ごし方は、念仏の申せるように過ごしなさいということです。それは今風にいえば、人生の第一義に生きなさいということでしょう。第一義とは、永遠なるものとのつながりがなければなりません。この世だけで終わるものであつてはならないということです。衣食住は、第一義を達成するための助けとなるもので、それを本来のものと思つてはならないということです。

your fellow practitioners. But if you cannot do so together with them, you should utter it secluding yourself from them. Securing food, clothing and a place to live is of help to the utterance of the nembutsu. (*Zenshobo Densetsu no Kotoba*)

Commentary

Here Honen Shonin instructs us to lead our lives in this world in such a way as to utter the nembutsu. Put in today's words, he will be telling us that we should live for a matter to which we assign primary importance. Such a significant matter should be connected with something eternal, not being such a thing as would come to an end in this world. As for food, clothing and a place to live, I think, he intended to say that they should not be considered to be of the utmost significance but preconditions for acquiring such a primarily important thing.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

祈りの心を 形にする

最終回

滝田 栄

インタビュー

たきた・さかえ

一九五〇年千葉県生まれ。文学座養成所から劇団四季を経て独立。

舞台「レ・ミゼラブル」の主役を十四年間つとめたほか、

TV「草燃える」「なっちゃんの写真館」「徳川家康」「マリン」などの大作ドラマで活躍する。

一方「料理ハンザイ」の司会を二十年間つとめた。

二〇〇六年、映画「不撓不屈」で主演。

〇六、〇七年奈良薬師寺の伎楽「三蔵法師求法の旅」で三蔵法師役を演ずる。

俳優の仕事のみならず、執筆、講演など幅広く活躍。坐禅、山歩き、陶芸を好む。

現在映像制作に邁進中。



編集部佐山（以下S） 滝田さんにとってのもうひとつの宝物である仏像彫刻に話を戻しますが、発端はお母さんが亡くなられて、観音さんを彫られた。仏像はお顔で決まるとも思いますが、彫る前にはどういうふうを考えていくのですか。

滝田（以下T） 仏像の顔というのは、一番難しいところですが、自分の思いの深さが如実に表れます。瞑想でも、いろんな思い、深さがある。仏様の顔というのは全部が出るんですよ。彫ってる人の。僕は、母の仏像に対する思いというのを見て育ちました。いつも、朝起きると父と一緒に仏壇の前でお線香をあげて、手を合わせるだけのことなんですけれども。とくに宗派というのでなく、観音様が置いてあつて、きつと自分のご先祖様を供養してたんだな。あるいは自分の両親が安らかであるように、子供達が元気に育つように、いつもここで祈ってたんだなと思ったときに、今度は僕の番だと思ったときに、母が僕たちに向けた眼差し、優しい目とか、母が微笑んだときの皮膚の感触とか、全部蘇る。彫刻刀に託すと、鉛筆や筆でかくように、彫刻刀を通して全部表現できるんですね。心がないことは形に出来ないんですよ、実は。これは面白いと思った。鉛筆で字を書くよりの確に心が現れますね。

S 彫刻でもとりわけ仏像にひかれたというのは、どんなきっかけですか。

T 母が亡くなったときに、一生懸命僕達を育ててくれた大恩人にほんとに感謝の思いを伝えたかったんですね。

S ご著書によれば、最初にあつた先生が、またいい



んですよね。「鉛筆を削れば誰でも彫れる」っておっしゃったという（笑）。

T 観音菩薩を彫って母の冥福を祈ろう。やりたいなアと、でもむずかしいだろうなアと躊躇していたときに、たまたま仕事先が関西で、友人にその話をしたら、「久保田唯心さんというプロの仏師がいる」と紹介してくれたんです。「仏像を彫ってみたいんですけど難しいんでしょね」と言ったら、「いや、ナイフで鉛筆が削れば誰でも彫れます」って言われたときに、それなら僕でも彫れるって（笑）。

S 宿泊先のホテルの部屋でたった四日で彫った。小さいお像といえど、素晴らしい作品です。もともと仏像への知識があつたように思えます。

T なんにもなかったんですよ。坐禅のまねごとをするくらいのもんで、呼吸が整ったときには心とか感じるけれど、知識というのはなく、ただ母を供養したかった。

S タイのお土産物屋でみつけた人形の顔がとてもいいと思って、それは陶器だから粘土で作られているんだけど、それを彫ってみたいと思われたとか。それはお父さんが亡くなられた後の供養の時でしたか。

T マリア様みたいな顔で。彫ってみたら、僕の父の母ね、おばあちゃんによく似てるんですよ。美人で、とても綺麗な人で、凄いいそくりで、ああ、父はおばあちゃんのところに戻ったのかと感じています。

S 明らかに技術が上がつてますよね。

T 20センチから一尺になって（笑）。これは鑿のみと金槌かなづちと使って、コンコン彫っていく。

S つぎがお兄さんなんですけれど、お兄さんのご供養に不動明王を彫られるんですよね。それがもの凄いい格闘で、三年かかったとか。

T これもなかなか凄い、でも彫れたんですよ。鑿と金槌で。

S 一般に材料は、檜・楠・松・桂・白檀等、今度ほどの木でやろうとご自分で選定するのですか。

T 先生に選び方を教えて貰って、大阪に銘木市場という材木商が競りに掛ける大きな市場があるんです。そこに頼んでおいて、競り落としてもらう。兄の時に一尺のを彫って、これが上手くいって、そしたらもっと大きくぼーんと彫ってみたくなった。それでいきなり自分の背丈ほどのお不動さんを三年掛けて彫ったんです。これは最初の本の重さが四百キロあったんです（笑）。

S 東京に運ばれて。

T いえ、大津の製材所にトラックで運んで。直径がかなり大きかったものですから。足の裏になる位置を決めて、中から大きな角材を切り出して。見たことありますかね。製材所で、ビューンと切るのを。それをトラックで長野のアトリエに運んで、重くてびくともしませんから、梁にエンジンなんか持ち上げるときに使うやつを取りつけて、それでガラガラと向きを変えながら。

S その制作はどちらで。

T 八ヶ岳に三十年以上住んでいんですけど、そこが作業場なんです。

S ご著書を読んではっと思わされたのですが、木彫ということに取り掛かると、室内がその木の香りに包まれるんですよ。最初は檜で、その匂いに包まれる。そういうこととて経験のない人は気づかないことですよ。楠などになると凄まじい匂いなんです。

T 檜は、気持ちいいです。

S 部屋中が檜風呂ですものね。

T お不動さんは楠で、これも素晴らしい。

S 樟脳の匂いでもんね。乾かないときは。いまどちらに安置されているんですか。

T 一番大きいお不動尊は八ヶ岳にあります。これは人にあげるのをやめようと（笑）。だいたい仏像って、できるとちょうど必要とする人が出てきて、あげちゃうんですよ。

S 依頼によらずに彫りたいものを彫るという感じですか。

T 頼まれて彫ったことも二度だけあります。でも、やっぱり自分の思いで彫った方がおもしろいかなア、と。

S 不動尊のお顔は素晴らしいですよエ。

T ちょっと彫りすぎなんですけれども、普通はそこまでいく前に止めちゃうんですけれども。

S ご自分では「運慶を超した」と（笑）。

T そんな大それたこと（爆笑）。でも、僕は運慶さんを心から尊敬していますから、京都の六波羅蜜寺にご自分で彫った運慶像がある。大きな仏像を彫るときは六波羅蜜寺にお参ります。心から一生懸命彫りますからと誓います。

S 滝田さんはお一人で彫るんですものね。運慶なんかは工房ですからね。

T 運慶さんはいわば公務員ですからね。確かに多くの弟子を使っていました。

S ダ・ヴィンチもミケランジェロも運慶も工房ですよ。一人でやるっていうのは凄まじいトライですよ。本職の俳優業との兼ね合いはうまくいきますか。

T いまは仏さんを彫るのが中心。今年はその世界遺産の番組をやっていたものですから、なかなか彫刻刀に触れられなくて。

S ご著書の中に「仏様を踏みつけ、またがり、叩いたり削ったりできるのは仏師だけである」（笑）。これはね、そうだなア、けだし名言だなと思いましたね。

T 足で踏みつけてね（爆笑）。

S いまどのくらいのペースで彫られるのですか。

T 僕は仏師ではないので、仏像彫刻はしますが、仏師はそれで生活しますから。大体一年に一体ですね。白檀の原木を貰って、そこから角材をとって、阿弥陀如来とお地藏さんを彫ったことがあるんですが。友達に不幸があつて落ち込んでいたときに、ではこれにお線香あげてと言って、喜んでもらったりしました。

S 白檀はなかなか手に入りにくくなってますね。

T そうですね。日本人が買いすぎて（笑）。このときは家中、白檀の香りで。

S 削った滓をお風呂に入れて入る（笑）。

T 夥しい量が出るんですよ。これを布の袋に入れてお風呂に使う。これは気持ちよかったです（笑）。

S もはや仏師・滝田栄と名乗ってもよいのでは。

T 仏師ではないですよ。阿弥陀さんは、先日、僕の友人のお寺で、比叡山が信長に焼き討ちされたとき持ち出された阿弥陀さんが広島から出てきて、それをご本山に置いた友人が居て、それを丈六の仏像に胎内仏として入れたんだけどっていう話があつて、やってみたいなァ（笑）。とても彫りたいんですけどね、材料がね。凄くかかっちゃうでしょ。

S 東日本大震災の直後に発心してお地藏さまを彫りましたよね。

T 東北ですね。震災の直ぐ後に、あまりにも大事件で多くの方が亡くなったときに、どうしようかと思つて、すぐになんらかの供養をしてあげなきゃいけないなと思つて、考えんですが、如来さんは偉すぎて相応しくない。観音菩薩は美しすぎるし。爆心地のような光景が、千葉の端から東北の端まで延々とつづいていて、ここにお不動さんは厳しすぎ

る。苦しみと悲しみに襲われている方々に。あ、お地藏さんだ。あそこまで打ちのめされてしまった人々にはお地藏さんしかない。そう思いました。アトリエに一メートル三〇センチの結構大きな角材があったんです。丁度いい大きさで、一気に絵を描いて、彫り始めて。だいたい人型ができはじめたときに、いまの薬師寺の管長さん、山田法胤さんと副住職の村上太胤さんが信州に用事があって、「いまから寄るね」って。いやいや家中、かなな屑だらけ。凄いですから、ゴミが。「汚れてますが」「ちよつと寄るから」って、お二人で突然みえたんですよ。「なに彫ってんの。ずいぶん大きいね」「これこれこうで、東北の被災者を供養しようと思って始めたんですよ」「いやー素晴らしいね」ってお二人が、お坊さんの着物なんて非常に高価なものでしょ。あの綺麗なものをお召しになってるじゃないですか。その二人が、削り滓だらけの床に、投地三拝。身を投げ打って祈ってくださいって「このお地藏さんを通して、東北で被災された方々の霊が成仏されますように、被災された方々が新しい道を踏み出すことができますように」って声に出して祈ってくれたんです。感動しました。あ、スゲーと思って。二年くらいかかるかと思っていたんですけど、それからガンガン彫って、四ヶ月でできちゃった。それから、阪急のビル。

S あ、数寄屋橋の、長く工事していましたね。

T 工事の前、ビルを建て替えるから、しばらく空いているんで、東北支援コーナーとして、壊すまで一階を開放するから使っていいよって、あそこを買った東急不動産が声を掛けてくれて、すぐお地藏さんを持って、百三〇kgもあって重いですけれども（笑）、とんできました。「これこれこういう気持ちで彫りました」と書いて置いていただいたんです。「これをお祀りするお堂を建てたいから是非みなさんご喜捨ご協力下さい」と書いて、お賽銭箱も自分で作って（笑）、一年間募金活動をしたんです。

S 気仙沼の地藏堂、ですね。

T ええ、気仙沼の。募金したら、全国の多くの方々からご喜捨いただいて、ネットに出したらアメリカからもご喜捨をいただいて、気仙沼に土地を提供して下さる人も現れて、立派なお坊さんがお住まいになれるような地藏堂が完成して、置いてくれた気仙沼の界隈の人達が奉賛会を作ってくれて、一年に二回、春と秋に法要をやっているんです。

S 有り難いことですね。

T 宗派を超えてやっています。いろんなお坊さんが来て何度も法要をして、僕は年に二度、春と秋の大法要のときに。春は大きなフェリーボートを借りて、何百人も乗っていただいで海で供養します。お坊さんにも乗っていただいて。

S 何を彫るかの選択がいいですね。如来さんでもお不動でもなく、お地藏さんって。

T 仏様の方便ていうのですか、その人に相応しい姿で現れてくるっていうじゃないですか。

S (深く頷く)

T 僕はそれが凄く好きで、あそこまで打ちのめされた人々に、如来の姿で偉そうにしてたってダメですよ。お不動さんの姿で叱りつけても残酷すぎるし。これはやはりお地藏さん。なんか相応しい姿が来てくれる、阿弥陀さんも、お不動さんも、観音菩薩も、好きなんですけど、なにしろ僕はお釈迦様が好きなんです。あの家康を動かした(笑)。お釈迦さんてどういう人なんだろうって一生かけて知りたいし、自分のものになりたいという気持ちですね。

S いずれは釈迦牟尼像に挑戦ですね。長時間にわたって、まことに興味深いお話をしていただいて、本当に有り難うございました。

(了)

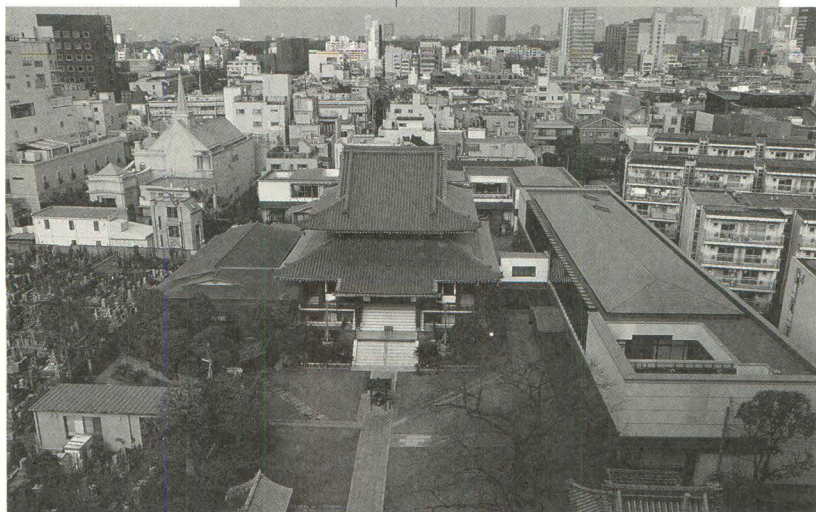
寺院紀行

東京・青山

善光寺

ぜんこうじ

文・撮影／真山剛



善光寺境内。本堂右手の客殿、左手の茶室は平成18年の改築工事で生まれ変わった

毎年四月初頭に浄土宗大本山増上寺で、浄土宗を開かれた法然上人への報恩感謝の意を表す忌日法要が厳修される。御忌と呼ばれる六日間におよぶ大きな行事である。後半の四月五日、六日、七日の日中法要では唱導師と呼ばれる特別な導師が関東、東京、東北・北海道からそれぞれ一名選ばれ、参道の大門からお練り行列、大殿前での庭儀式、そして大殿での大法要と、数ある増上寺の法要や行事の中でも最も注目される導師となるのが、この御忌である。

そして、今年の御忌の四月六日の日中法要は増上寺の御忌の歴史に残る特別な法要になる。唱導師を初めて尼僧が務め、百五十人を超える僧侶が随喜（法要に喜んで参列すること）し、しかもその中にも三十五人もの尼僧が加わっているからである。

これまでも増上寺の大殿で導師を務めた尼僧がいない訳ではない。が、こと御忌唱導師となると今回の青山善光寺住職、眞蓮社實譽念阿観恵上人が初めてとなる。

その記念すべき導師を務める川名観恵住職に、一月二十五日の御忌唱導師伝達式（カラー写真）の直後にお話を伺った。

「厳粛な式中、大本山増上寺法主八木季生台下と対面させていただいた時、法然上人像と向き合った時には有難い想いで胸が一杯になりましたし、また、城西組の諸大徳より推挙された大役ですので、厳粛な気持でお勤めをしなくては改めて心から思いました」



善光寺山門と寺塔。寺塔の横に各種行事が案内されている

さて、この歴史に残る御忌法要の導師、川名住職のお寺、善光寺は東京青山の表参道交差点からすぐで、川名住職が第十六世となる。

善光寺といえば信州の善光寺を思い出す方が多いだろう。いや、本誌の読者なら思い出すどころか、七年に一度の今年の御開帳に合わせた参拝計画を立てている方が少なくないかもしれない。

「一生に一度は参れ善光寺」「遠くても一度は参れ善光寺」と言われる日本の庶民信仰の原点である信州善光寺は千四百年の歴史を持ち、日本各地におよそ百二十か寺ある同名の善光寺を中心に約五百の会員を持つ全国善光寺会を組織している。

今でこそ新幹線や自動車があるが、かつては徒歩が移動手段、信州までお参りにいけない人の方が多いことから、同じ一光三像阿弥陀如来を本尊とする善光寺が日本各地に建立されてきたのである。

もちろん青山善光寺もその一つ。信州は遠いと武蔵国江戸表へ呼び寄せたのは信州へ来詣していた江戸在の信徒たちで、その度重なる発願に信州善光寺大本願の第百九世円誓智慶上人が応え、徳川家康の勧請という形で慶長六（一六〇一）年、谷中に善光寺が建立されたという形で伝えている。

そして、百年後の火事で焼失したのを期に現在の青山の地に移転したのが宝永二（一七〇五）年、谷中時代同様に徳川將軍家が七堂伽藍を建立した。時の住職は信州善光寺大本願の百十三世心誓智善

寺務所も兼ねる客殿はシンプルかつモダンな建物だ



上人で、先の智慶上人を青山善光寺の初代とするので、智善上人が第五世となる。この智善上人は近世の三尼僧上人の一人で、時の天皇から紫衣勅許状を賜り、また一光三像仏が沈められていた大阪の堀江に和光寺を建立するなど、大いに寺門を興隆させている。そして第七世智観上人は江戸城大奥へ登城するなど青山善光寺は徳川家との縁も深い。また、第九世の皇族の出の伏見宮誓円尼公上人時代には信者の数も一段と増え、当時出回った『江戸名所図絵』にも青山善光寺として記されることになる。

が、文久二（一八六二）年の火事で再び類焼、六年後の明治維新で徳川家という大檀越を失った上に新政令で尼僧の還俗、皇族の僧籍はく奪が行われた。誓円尼公上人は「身にまとった袈裟は取り得ても、心につけた袈裟は取りえぬ」、「終生、仏弟子として念仏弘通のために捧げる」と皇族の身分を捨てて廃仏毀釈に立ち向かった。そしてこの誓円尼公上人を最後に信州善光寺大本願の住職が青山善光寺住職を兼ねることなく別々の尼僧が住職になるようになった。

維新後の荒廃の中で第十四世専譽清観上人が明治四十年から堂宇再興に着手、四十年の長きに亘り心血を注ぎ続けた伽藍復興の大事業が完成したのは昭和十九年。完成直後の秋、清観上人は遷化されることになるのだが、翌年五月の東京大空襲で完成直後の伽藍が炎に包まれるのを見ずに済んだのは、むしろ良かったのかもしれない。



事務所の扉を入るとそこは吹き抜けのある広い玄関になっている

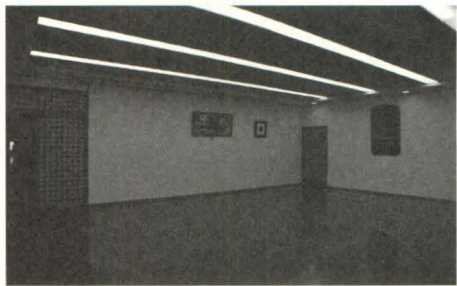
そして第十五世には、観恵現住職の師僧となる明治生まれの小林観導上人が就任。小林住職は戦後直後から平成九年に九十八歳で遷化されるまで五十余年に亘り住職を務め、昭和二十三年には幼稚園を開園、昭和六十一年にやむなく閉園するまでのおよそ四十年間、地元の子供たちの集いの場所にもした。また、この間に増上寺の御忌法要で御代理導師を務め、昭和四十九年には青山善光寺の本堂庫裏を再建している。そして、弟子の一人であった川名観恵上人が平成九年に第十六世住職となられたのである。

その川名住職に生い立ちを伺った。

昭和十五年東京の荏原中延に生まれ、妹がひとり。強制疎開で農家の次男だった父の実家、千葉県保田海岸へ。昭和二十年、母が長患い後に病死、翌年には戦争から無事帰った父も病死。川名姉妹は離れ離れとなり親戚の家を転々とすることになる。八歳の時、保田の別願院で青山善光所属の教師とご縁をいただき、善光寺住職小林観導上人のもとへ入門、青南小学校から青山中学、そして十五歳の時剃髪し弟子となり京都の尼衆学校へ入学する。川名住職は当時をこう振り返る。

「育ててくれた観導上人と先輩の尼僧さん達の姿を見ていて出家には何の抵抗もなかったですね。むしろ、尼僧になれば両親の供養ができる、と自分の明確な意思で出家、尼僧になることを決めました」

客殿の山門側の善光寺会館2階ホール



こうして、昭和二十九年、決意を固め尼僧養成の学校に入ることとなった。

入学したのは知恩院の境内地にある尼衆学校。入学生は十二、三人、全学年で三十人位の尼僧養成のための寮生活の専門学校。生徒の年齢差はあるが、みんな出家を志した女性で、在校中剃髪し続け、尼僧としての修行と教育をうける生活を送る。

卒業した川名住職は青山善光寺へ戻り、以後尼僧としての生活の中でお茶の師範となり、平成二十三年からは尼衆学校及び吉水学園の卒業生で構成される尼僧の会である吉水会（現在会員百九十七名）の会長、また公益財団全日本仏教尼僧法団という組織の理事長も務めている。

さて、ここで浄土宗の尼僧教育の源を探ってみよう。浄土宗の尼僧教育は明治仏教界の泰斗として僧俗から敬慕された福田行誠上人と、その門弟の輪島聞声上人という尼僧に行きつく。昭和三十六年に発行された『浄土宗尼僧史』、同四十四年に発行された『吉水学園史』という二冊の本には活躍した尼僧の足跡、そして浄土宗内での尼僧教育の歴史が詳しく記されている。どちらも復刻されて多くの人の目に触れるべきだと思う本であるが、ここにその『吉水学園史』から聞声上人が明治十九年に東上して浄土宗宗務所に尼僧教育



境内茶室の庭に残る一八六八年に
発明された人力車発明記念碑。上
部が欠けている

に関する建議書を提出する動機となった福田行誡上人の訓戒を引用しよう。

「今の世、僧尼の数は少なからず。しかれども、これらはすべて亡者の導師にして、生者の善知識にあらず。仏一代の説法は六千余巻もあるが、その一一の経文は、ことごとく生者を導くためであって、死者のための説法は一つもない。これを思へば天下一人のよく仏命に契った僧尼はないことになる。御身せつかく出家するならば、決して滔々たる亡者の導師に伍することなく、ひとり生者の善知識となつて、仏命に契ふことを、これを勤めよ」

この言葉を受け輪島聞声上人は尼衆学校を創立、以後浄土宗は数多くの尼僧を世に輩出することとなる。また、聞声上人と同時代の颯田本真上人も『浄土宗尼僧史』に立項されている二十人の中でも詳しく取り上げられている布施実践の尼僧であり、歴史を繙くところとした活躍された尼僧は少なくない。とはいえ二人とも江戸末期の生まれ、現在の尼僧の状況は、と浄土宗に問い合わせてみた。

尼衆学校はその後回か名前を変え、平成七年に吉水学園高等学校として廃止、並行して設立された尼僧道場も廃止され、現在は男女一緒の養成道場で僧侶になるという。この尼僧に女性教師、女性教師とは剃髪、独身、団体生活という尼僧の条件を満たさない女性僧侶のことだが、尼僧と女性教師を合わせた人数は九百四十人（平

茶室前の庭には松尾芭蕉の句碑が建っている



成二十七年二月一日現在)。ちなみに男性教師は一万九百十三人。割合でいうと、女性教師は全体の教師の八パーセントになり、尼僧に限るとおそらく三パーセントを切ることになるだろう。

また、全国の七千二十九か寺の浄土宗寺院で尼僧を含む女性教師が住職を務める寺院は二百九十八か寺だそう。一般的な傾向としては尼僧さんが減り女性教師が増えているということだ。

さて、こうした推移はともかく、尼僧団体を代表する青山善光寺の唱導師による御忌は意味深い。川名住職を推挙した浄土宗東京教区城西組組長の久野真人法正寺住職の言葉で締めくくろう。

「私たち城西組は、歴史に残る川名観恵上人の御忌唱導師という大役が無事お務めいただけるよう組あげての支援体制を敷き、その成満を心より願っています」

平成二十七年四月六日、青山善光寺の歴史に新たな一頁が刻まれることになる。

(ルポライター)



参道脇に建つ高野長英の記念碑

ただ自分のしたことと、しなかつたことだけを見よ。

『ダンマバダ』五〇。岩波文庫『ブッダの真理のことは 感興のことは』

祈らせてください

あすで四年。短くも、また長くもあつたこの歳月を、どう振り返るか――。

東日本大震災で被災された方々にとってのみならず、直接に体験してはいない者にとつても、それは必要な作業なのかもしれない。けれど、被災された方には、あまりにもつらい痛みと、深い哀しみが伴うのを避けてはでき得ない、残酷な作業であることも事実だ。「そんなこと、無理」。深い嘆息も聞こえてきそうである。

震災関連の記事が新聞の紙面やテレビのニュースから影をひそめるようになったのは（少なくとも、主観的にそう感じられるようになったのは）いつごろからだつたらうか。地元のメディアはそんなことはないのだから、たとえば主要紙東京版の場合、毎月十二日、いわば月命日にあたるその日の翌日には、かろうじて「〇〇で行方不明者の捜索活動がなされた」とか、「〇〇で慰霊鎮魂の行事が行われた」などと、さほど大きくないスペースで扱われることはあつたように見受けられたが、それ以外はほとんどなかったように思う。当然、人の意識の中から、震災は遠ざかることになる。

記憶とは、いや、人間とはそんなものか、と思う。自分の耳目に入つてこないものは「ない」と勝手に判断する性を持っている。その意味で、受け手も愚

か（これを無明^{むみょう}というのだろうか）だが、メディアというものは一種の恐ろしさを宿しているといえなくもない。皮肉にも、そのいずれも人間の所業。

ここひと月くらいは、そのメディアでずいぶん地震を取り上げてきている。テレビもラジオも新聞も、軒並み特集を組んでいる。

なぜ、この時期に向けてにわかになったのか。「区切り」「節目」、そう位置づけようとする意図が、そこには垣間見られる。筆者が今回、震災のことをここに記すことにしたのも、自身の中に類似したものが作用したからにほかならない。そうした意図を喚起させる役目を担っているのが歳月というものであるかもしれない。その意図が報道という形になり、それにより、薄れていた受け手の記憶がよみがえり、現状を知り得、何かを感じることができ、次への行動へとつながりもする——そんなふうに考えながらも、しかし、筆者の頭の中では、宮城県・石巻でお会いした、小学生のお子さんを津波で亡くした女性^{女性}の言葉が駆け巡っている。

平成二十四年九月十一日だった。その日は、「今日で一年半」など、〃節目、区切り〃のニュアンスを滲ませた言葉がテレビや新聞に多見された。

「子どもを亡くした親には、いつになっても節目なんかやってき……」

語尾は涙に流された。あの方はあすを、どんな思いで迎えるのだろう。

昨日のテレビでは、いまだ二十万人ちかくの方々が四十七都道府県に避難していると告げていた。仮設住宅の減り方が鈍い、とも言っていた。生活の再建が進まないと多くの人が訴えている。筆者の故郷である仙台の知人の話などからは、ある時期から被災地での時の進みが急に遅くなったようにうかがえる。行政との、あるいは被災者同士の対峙構造が続いている地域もあると聞く。その行政に携わる人々、また復興作業や被災者のケア、サポートの従事者にも被災者は多く、心身ともに疲れきっている人もいるという。さまざまな問題が、深く、広く横たわっている。昨今の報道に、ため息ばかりが続いて出る。

筆者には……。

この震災に対し、際立った何かをすることもなく過ごしてきた四年間だった。故郷でのことであってみれば、けっして遠巻きに見ていたつもりはなかったのだが……。

あす、午後二時四十六分、ともに祈らせてください。

(小村 正孝)

東日本 大震災の 被災地を 訪れて

成田淳教

東京世田谷感応寺住職
関東ブロック浄土宗青年会理事長

東北に未曾有の大被害を与えた東日本大震災からはや四年の月日が過ぎたが、発生直後から今日まで被災地を毎月欠かさず訪れている浄土宗の青年僧がいる。東京世田谷の大吉寺に生まれた成田淳教師だ。師に、被災地の過去から現在、そして訪問し続ける中で感じることを連載していただく。被災地の「いま」を忘れないためにも。

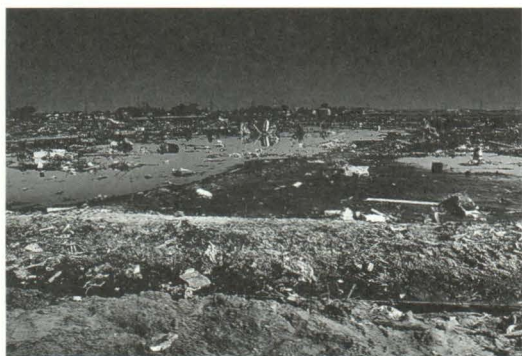
写真撮影／成田淳教

東日本大震災から四年余りが過ぎましたが、東北ではまだ現在進行中の災害とよく言われています。

確かに毎月東北の被災地のどこかに伺い、お話を聞いているとそれを実感します。当然のことなのですが、各被災地の状況は地域や人によってそれぞれ異なりながらも日々変化し、そして新たな問題が生じ続けています。

平成二十三年三月十一日、私は東京教区浄土宗青年会の会長を務めて一年が過ぎ去ろうとしていた頃でした。それまでも、国内外で大きな災害が起こると、浄土宗東京教区青年会の街頭募金活動に参加したり、各種ボランティア団体などに募金することはしていましたが、東日本大震災を境に私の意識は大きく変化し、現在に至るまで毎月東北被災地に伺うことを続けています。

東京でも大きな揺れを感じましたし、各種報道や関係者から頂く情報で現地が想像を絶する被害に遭っていることを知り、一刻も早く現地へ入りたい気持ちが起こり、どうしたら現地に入れるのかを懸命に模索しました。奔走の末、実際に現地入りできたのは三月末のことでした。その時私は、同じ日本国内の浄土宗寺院やその檀信徒の方々が被災され、青年会の仲間が様々な復興支援活動をする中で、日



大震災で荒れはてた景色となった宮城野区

本人として、僧侶として、青年会員として、共に行動する必要性を強く実感していました。

福島県に住む修行時代の仲間の町に避難所ができていることを聞き、そこに幾らかの食物や燃料を、仏具店様にパンを借りて、大阪の仲間と二人で伺ったのが最初の被災地入りになりました。その後、全国浄土宗青年会の差配で東京の青年会の仲間と共に宮城県仙台市の照徳寺に伺いました。副住職が作業服・ヘルメット姿で寺の境内に流入した物の撤去作業を始めたと事前に新聞記事で見えており、照徳寺の状況は知っていました。

最初の福島訪問、そして照徳寺訪問時に、言葉に表せない衝撃と共にあまりの惨状に現実感を伴わない不思議な感覚になったことは忘れられません。

照徳寺に着くと、寺に生まれ育った人間として、同じ寺院のその惨状を見て急激に現実感を伴った感情に襲われ、一刻も早くこの寺を直さないといけないという強い衝動が起きました。一通り説明を受けて直ぐに作業に加わり、その時は一日だけでしたが、共に片付けをさせていただきました。

その後、月に数回のペースで照徳寺に伺い、夏前頃から



被災直後の照徳寺

は石巻市の西光寺にも伺うようになりました。平成二十三年はこの両寺院の境内片付けが主な活動になりました。次第に寺院からも町からも流出物が片付き、翌二十四年には仮設住宅等に入られた方々を対象とした傾聴活動をはじめ、いた福島県浜通り組浄土宗青年会による「浜〇（はままる）カフェ」のお手伝いにも伺うようになりました。また、同時に東北ブロック浄土宗青年会の「ともいきカフェ」や、東京の青年会で被災地での復興応援イベントを企画したりと、いろいろなご縁を頼りながら現在まで最低月に一度を目標として、現地の方々と共に一日でも早い復興を目指す気持ちで通っています。

今年の二月十八日にも「浜〇カフェ」に伺いましたが、この活動は二百回を超えたそうです。現在進行中の災害という実感を持ち続ける為にも、被災された方々の為にも、各種活動の継続が重要であることを感じさせられました。

(つづく)

なりた じゅんぎょう 感応寺住職

昭和50年1月、世田谷大吉寺に生まれる。平成13年より感応寺住職。

平成22年浄土宗東京教区青年会会長。平成24年東京浄土災害対策委員長。

平成26年関東ブロック浄土宗青年会理事長（現職）

被災直後の照徳寺墓地



連 載

会いたい人 関 容子

野村萬斎

さん

②

撮影／小野田麻里



宿願だった『MANSAI ボレロ／転生』を観た。平成二十六年十二月、東京都現代美術館のホールで、二回だけの公演だった。『MANSAI ボレロ』の初演は平成二十三年十二月、『狂言劇場 その七』（世田谷パブリックシアター）。このときは『三番叟』を『ボレロ』と重ね合せながら、生から死、そして再生する生命への祝福をテーマにしたと聞いた。ラヴェルの『ボレロ』の執拗な繰返しと終盤に向けての生命の溢れる盛り上がり、『三番叟』の姿で舞うという発想はさすがと思う。

『三番叟』との共通点を見出したのは、実は父（万作師）なんです。ベジャールの振付で、シヨナ・ミルクという女性のバレエダンサーが踊る『ボレロ』を観て、父は非常に感銘を受けたらしくて、いつか自分も『ボレロ』を踊りたい、と家族中に言っていました。でもこれは実現しなかった。

ずっと経って東日本大震災直後、やはり世

田谷パブリックシアターの芸術監督企画『解体新書』シリーズに、実際に『ボレロ』を踊られたバレエダンサーの首藤康之さんを招いて話したとき、『ボレロ』が循環構造で同じフレーズを繰返しながら盛り上がっていくというのと、『三番叟』の僕が思っている下へ、大地へと向かうイメージとは多少異なるようではあるけれど、大いに共通性はあるなと感じました。

その対談のとき、首藤さんに『ボレロ』を教わって、“なんちゃって”で踊ったのがきっかけで、翌年の『狂言劇場』での初演になったんです。その後何度も上演してますよ。フルオーケストラとも三回くらい共演していますし、世田谷パブリックシアターでも二回、それから日本舞踊四十人の群舞を従えて踊る『ボレロ』というのもありましたね。」

そして今回の「転生」と銘打つボレロは、折口信夫が生涯で唯一完成させた小説『死者の書』から想を得たという。



世田谷パブリックシアター「狂言劇場 その七」より
『MANSAI ポレロ』(2011年)

撮影：政川慎治

『死者の書』とは、反逆を企て死罪となり二上山に葬られた大津皇子の亡霊を、中將姫が蓮糸で織り上げた曼陀羅によって供養するという物語。

方形の平舞台。白い直垂姿の皇子の亡霊は、暗い洞窟を思わせる闇の中に胎児のようにじつとうずくまっている。やがてその白い衣裳をスクリーン代りにして、水滴のようにも精子のようにも見える強い光の粒子が泳ぎ回り、その生命のエネルギーが浸み入って死者を蘇らせると、萬斎さんが徐々に踊り始める。ラヴェルの『ボレロ』の繰返しが螺旋階段を登るようにだんだんと高揚して行き、まばゆい光の曼陀羅の中で救われて転生するのか、踊り手の身体がまるで糸操りの人形のように、あるいは、無重力状態の宇宙船の中みたいに、いとも軽々と高い跳躍を繰返す姿には目を見張った。

こんな身体能力の高い、自らを「狂言サイボーグ」と称する萬斎さんは、いったいどんな

な育ち方をしたのだろうか。

野村萬斎（本名野村武司）は昭和四十一年、狂言師の二世野村万作と、詩人阪本若葉子の長男として東京で生まれた。

萬斎の名は祖父・五世万蔵の隠居名を、二世として襲名したもの。

前にも引いた萬斎さんの「僕は狂言サイボーグ」という詩の冒頭にこうある。

僕は三間四方の小宇宙

能舞台の楽屋裏に生まれた

父に改造され

母から感性を授かり

祖父に演じる喜びを教えられた

「僕の母方の祖父の、腹違いの弟というのが作家の高見順で、つまり僕の大叔父さんになるわけです。また母は永井荷風とも血のつながっている親戚で、僕の顎が長いのはそのせ

いだと言われています。荷風はあれだけの知識人で、あの時代に欧米にも渡っているような人なのに、一方でストリップ小屋に出入りしたりして、両極端の人ですね。僕がいろんな世界に興味を持つのもややそれに共通するのかも知れない」

萬齋少年が黒澤明の『乱』に出演するチャンスを作ったのもこの母上だった。

『乱』はシェイクスピアの『リア王』を日本の戦国時代に移し、ピーターが演じた道化の役が狂言師の設定だったので、万作師がその狂言指導に当たった。最後に生き残る盲目の少年鶴丸役には、能の『弱法師』をイメージしていた監督が、万作師にこう依頼する。十歳前後の能楽シテ方の子息の写真を集めてほしい、と。その数枚の写真の中に、萬齋少年が『三番叟』を披いたときの写真をそっと混ぜておいたのが他ならぬ母上だった。また、それとなく読書の方向づけをしてくれたのもやっぱり母上らしかった。

「嘘か誠か、父は『洋館に住むお嬢様の元文学少女』にあこがれて（笑）、母と結婚したそうなんです。しかし父は稽古となると怖かったですね。扇が飛んで来て、後ろの襖がポコポコの穴だらけになっていたこともあります。本番の舞台で揚幕に入るなり殴られたこともありましたからね。動物と調教師の関係ですよ。」

だからのちになって現代演劇に出演するとき、演出家が灰皿投げたからって、別にどうってことはありませんでした（笑）

こうして徐々に狂言師としての身体に改造されてゆくわけだが、しかし萬齋少年は狂言師への道を一途にめざしていたわけでもなかった。

東京教育大附属（今の筑波大附属）小学校に通っていたころのこと。

「家が文京区でしたからすぐ近くの小石川植物園の塀を乗り越えて無断入場して（笑）、よく庭園で遊んでました。スルメを餌にして

ザリガニを釣ったり、裸足で池に入って牛ガエルのおタマジヤクシをザルですくって取ったりね。

将来については、あのころ、和食が多い家だったので、単に洋食がもつと食べたいばかりに、コックさんになりたいとか、父が車を運転しないのもつと車に乗りたくて運転手になりたいとか、相撲が強かったんで相撲取りになりたいとか（笑）。僕は小学校では前から六番目くらいの身長でしたけど、狂言による下半身の鍛練のおかげか、相手の出てくる勢いを利用して投げ飛ばすのが得意だったので、いつも横綱でした。

僕は狂言師になることを父から押しつけられたんじゃない、自分の意志で自分の道を選べた。考える余地を与えてもらえたのは、父のおかげだったと思っています」

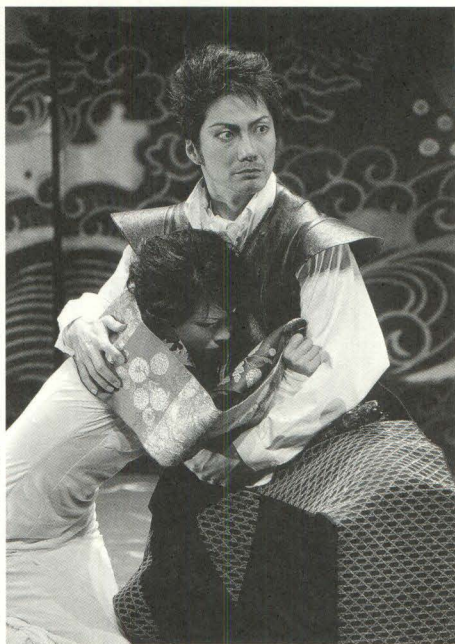
万作師は褒めて育てるタイプではなかったというが、萬斎さんの運動神経のよさには注目していたそうだ。

「唯一、父に間接的に褒められたのは、大学一年のころにやった『鍋八撥』という曲で、僕は父の相手役でしたが、これはアクロバットの必要な要素の強い役で、最後に舞台から橋懸りの揚幕までを側転しながら入る『水車』という技があります。脚がきれいにまっすぐ伸びて、水車のようにくるくる連続回転して入らなくてはいけません。このときは狂言では珍しく、まだ途中なのに客席から拍手が起きました。今の狂言界であれだけキレイに水車できるのはいないと他人に話していたそうです。

狂言にはほかに、歌舞伎でいう『トンボ』（空中で前転する）とか、『高欄越え』（橋懸りの高い欄干を飛び越して前転する）とかの運動神経がよくないといけない技があります。父は、狂言師は身体がきくのが当たり前、という考え方で、小学校のころから勉強の成績については何も言わずに、体育の成績だけはちゃんとチェックしていましたね」

世田谷パブリックシアター『マクベス』（2014年）会場…シアタートラム

撮影…御堂義乗



萬斎さんの舞台でまた別に注目される点は、その声の魅力だろう。

あるとき『マクベス』の稽古場を訪ねて、暗い闇の底から沸き起こるような、力強いのに静かで、鍛え抜かれた低い声の輝きに改めて気づかされたことである。

「僕が初めて『声ができあがった』という自覚を持ったのは、大学（東京藝大・能楽専攻）二年で『奈須与市語』^{なすのよいちごころ}を抜いたときです。煙草をやめないと教えない、と父に言われて禁煙して稽古にのぞみました。この曲は発声の技術を駆使して見せる曲ですからね。自分の声の存在感を身につけて、その操作に自信が持てたのはこのときです。

狂言の発声というのは、喉を開放しないで引いた、内なる声として出します。焦点を絞った声、一点にフォーカスさせた声ですね。前に、ギリシャ悲劇の舞台に出演したとき、演出家から声を遠くに飛ばすように要求され

た。喉を開放して、拡声器的に「わが市民たち！」と叫ぶ。この発声を狂言に持ちこんでしまったら父に叱られました」

狂言の発声は目の前にいる観客一人一人に当てるように声を出すのだと、萬斎さんはこのとき私と同席した二人も含め、一人一人に顔を向けて「あなた」「あなた」「あなた」と鋭い声を発した。語勢に射すくめられて、三人は心地よく討死にさせられた覚えがある。

そのとき感じたのは、日本の伝統芸能は武道に通じるところがある、ということ。

「ええ、何人を相手にしても、一人一人ずつ打って行くしかありません。

父との稽古も一対一です。父が『このあたりの者でござる』という台詞をまず投げてくる。剛速球だったり変化球だったりする。その印象を受けてこちらも投げ返すわけで、まさに真剣勝負ですが、そのとき声が拡散しては負けてしまうわけですよ」

ずっと前に見たテレビ番組で、萬斎さんの

声がどこから出ているかを実験する、というのがあった。

「ああ、音カメラというのをつけられて、これは騒音の発生源を調べる建設用の機材の転用だそうです。オペラ歌手は楽器化した上半身からワァーツと大声が出るんですが、僕は背中とか下半身、なんと足からも出ていました（笑）。

われわれ伝統芸能にたずさわる者の身体の重心は下にあつて、目の前にいる観客に声を明確に伝えたいという意識が自然に下へ行きますからね、その結果ではないでしょうか」

歌舞伎の世界でよく言われる「一声、二顔、三姿」といういい役者の条件は、まさに総ての舞台俳優にあてはまると言える。

（この頃つづく）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

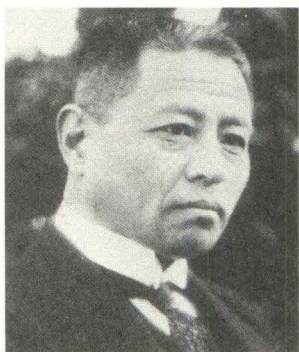
前田和男

第五十七回

第二部

ライン
来江の古城遙かなり

いざ、博士号取得へ



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、さらに明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として、廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担って、当時印度学の拠点であったドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍ら、キリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、スイスはバーゼル万国宗教歴史学会で研究発表、そこで仏教に造詣が深いオーストリアハンガリー帝国元駐日代理公使クーデンホーフ・カレル・ギー伯爵と出会い刺激を受ける。ストラスブルクに戻った「半年先輩」で同じ宗門海外留学生の萩原雲来から、ヨロツバ初初比丘であるニャーナティロカ存在を知らされ強い興味を覚える。一方、当初の留学期限が切れ何とか延長を許されるなか、雲来はケンブリッジ大学の蔵書から仏教聖典「瑜伽論」菩薩地の原典を発見する快挙をなし博士号取得、ついに帰国の途につくことになった。海旭にもそろそろ成果が求められていた。

博士号を条件に留学を延長

五年余も、昼は大学で夜は下宿先のアパートで机を並べ、寝食と学を共にした萩原雲来が帰国。異境に一人とり残された渡辺海旭は、周囲が心配したとおり、心に穴がぼっかりあったような状態で過ごす日々がしばらく続いた。

二か月の船旅を終えて年末には故国に戻った雲来が大歓迎されたことを「浄土教報」で知って、海旭の帰心も逸った。病身の母上はご無事だろうか。二人の妹は嫁いだ先でうまく折り合いをつけているだろうか。早く帰って家族に会いたいものだ。海旭を仏の世界へと導いてくれた端山海定師もとうに古希を超えられたはずだが、いかがお過ごしだろうか。尊顔を拝して来し方を報告し、行く末について縷々相談もしたい。しかし、「手ぶら」で帰るわけにはいかない。なんとしても博士号をとってそれを手土産にしなければ、家族に

も師にも合わせる顔がない。だが博士論文は、何をテーマにすればいいのか、入り口のところまで戸惑っていた。そんなあせりが、海旭をますます「宙ぶらりん」の状態から抜け出せずにさせていた。

当地の暦で一九〇六年、日本の暦では明治三十九年があけて二か月ほどして、そんな海旭を心配したのか、ロイマン夫妻が自宅に食事招いてくれた。

挨拶もそこそこに、ロイマンは訊ねた。「ワタナベ、博士論文の進捗はどうかね？」

海旭は頭をかいた。「それが、なかなかテーマが定まらなくて……ヲギハラがいればもうもろ相談に乗ってもらえるのですが」

ロイマンは身を乗り出した。「だったら、しばらくは私の仕事を手伝ってくれんか。君も知っているとおり、いま、わがドイツをはじめ、イギリス、フランス、ロシアの探検隊が中央アジアで古写経典をさかんに発掘し、その同定作業で、われら数少ないインドロギ

スト（印度学研究者）は大忙しだ。そのなかからこれはというテーマがおのずと見つかるだろうて」

紅茶を運んできた夫人が会話に割って入った。「ヲギハラがいなくなつて困っているのは、むしろあなたではないのかしら。ワタナベをヲギハラの代りにして頼りにすると、かえつてワタナベの博士号の取得が遅れるのではないかと心配ですわ」

「いえいえ、よろこんで」と海旭はかぶりを振った。「これまでもやってきたことですから。ヲギハラに分もくわえて、なんとかお役に立つよう微力をつくすつもりです」

「ところでワタナベ、学費と生活費は大丈夫なのですか」と夫人はお手製のクッキーを茶菓に勧めながら言った。「先立つものがないければ、博士号の取得どころではないでしょうに。ましてや主人の仕事のお手伝いなどしている暇などないではありませんか」

海旭の留学の「年期」はとつくに切れてい

た。そもそも出発時には四年で帰国する約束だった。海旭は二年前の十二月で帰国しなければならなかったが、ロイマン教授の「嘆願書」で雲来とともに宗門から「延長」を認めてもらい、そのおかげで雲来は見事博士号を取得して帰国できたという経緯があった。

「ロイマン先生から嘆願をしていただく手は、もう使えません」海旭は紅茶を啜り終えて卓に戻した。

「あらごめんなさい。紅茶よりもビールほうがよろしかったわね」と夫人は言う、すでに卓上の用意してあったジョッキに琥珀の液を注いで、「で、どうなさったの、宗門からの仕送り」と先を促した。

「今度は博士号に嘆願役をお願いしました」海旭はビールを一口ぐりとうまそうに飲むと続けた。「宗門のためにもこのまま手ぶらで帰るわけにはまいりません。雲来につづいて私が博士号をとるまでは仕送りの延長をお願いしたいといって、なんとか了解をいただ

きました」

ロイマンは目を輝かせた。「それはよかった。では、私の仕事の手伝いも……」と言いかけたところを夫人に遮られた。「あら、あなた、それではかえってワタナベの博士号の取得が遅れるでしょ」

再び妻に釘をさされて、ロイマンは慌ててかぶりを振った。「もちろん、私としては一日も早くワタナベに博士号を取得してほしいさ」

これも本心だったが、夫人の「勘ぐり」もまた本心だった。ロイマンは腹のなかで、「ワタナベにはもう少しこの地に留まって私を手伝ってほしい」と念じたが、口には出さなかった。

ロシア革命の犠牲者のための慈善音楽会を

海旭はビールを飲みほすと、ふっと息をついてロイマン夫人へ顔を向けた。「ところで

奥様、お願いがあるのですが」と懐から一枚のチケットを取り出すと言った。「ロシアの革命党員の友人が、昨年末来モスクワで多発している横死者のために慈善音楽会をやるうというので、私も友人のよしみで微力ながらひと肌脱ごうと思ひまして…」

一年前の一九〇五年（明治三十八）、日本に敗北したことが契機となつて、ロシアではツァーリ（皇帝）打倒の運動が頻発。各地で圧制からの自由を求める暴動や蜂起が続発し、これに対してツァーリ政府は武力で弾圧を繰り広げた。その掉尾^{とうび}をかざつたモスクワでの攻防は熾烈をきわめ、千人を超える死者を出して市民側の敗北におわり、その後も政府側からの報復で残党に対する殴打による闇討ち事件が後をたたなかつた。

ここドイツはストラスブルクでも、知識層の間でその惨劇が話題になり大いに同情を買つていた。

「それはとても、立派なことだわ」とロイマ

ン夫人は言う、チケットを受け取り、五十マルク札を差し出した。

海旭は札を押し戻した。「音楽会は二マルクです、多すぎます」

夫人は再び札を手渡した。「残りは寄付にさせていただきますわ。それにしてもロシア人でもないのに奇特なこと。たしかあなたのお国でも大飢饉があつて大変だとか。おつりはいいから、余りはそちらの義捐金に回してちょうだいな」

夫人が言つた「日本の飢饉」とは昨年、東北地方を襲つた冷害による大飢饉で、当地の新聞でも大きく報道されていた。

海旭は紙幣をありがたく押し戴くと、深く頭を下げ、合掌して言つた。「これは驚きました。先日ある銀行員からも五十マルクもの大枚をいただきましたが、まったく同じことを言われました。その一部を日本の大飢饉にあててもらつてかまわないと」

「で、どうなさつたの？」と夫人は訊き返し

た。

「そこはやせ我慢をして、お気持ちだけ頂戴すると言って、全額音楽会のほうへ回しました」と海旭は口元に笑みを浮かべた。「奥様のご寄付もそうさせていただきます。ロシア革命党員の留学生は化学者なのですが、ピアノは玄人はだし、もう一人の医学生と組んで、チャイコフスキーに挑戦します。他に留学生仲間によるオペラの出し物もあります」

「それは素敵、ぜひ観させていただきます」

と、ロイマン教授が眉根をよせて会話に割って入った。「慈善はそこそこにして、学問に専心すべきではないのかね」

「あら、両方やってどこがいけないの」と夫人は即座に言い返した。

ロイマンが目落として口をつぐむのを見て、海旭は苦笑いを浮かべた。「どうも当地ではご婦人方のほうが細民救済事業に理解があるようです。そういえば、先日こんな出来事にでくわして、つくづくそう感得した

次第です」

と言って、昨年年の瀬に街なかを散歩して見かけた新教徒による慈善市について語った。良家の夫人や令嬢が、自らがつくった小間物などを売り、あるいはビールカフェの給仕をしたりして、売上は困窮民の援助にするのだという。説明しおえると、海旭はこう付け足した。「さっそくわが宗門の機関誌に書いてやりましたよ、『吾宗の諸大徳、願わくばその檀家信徒をときてこの趣味ある慈善事業を行い玉はむこと、切望の至りに候』と。まあ、宗門は私の提案を素直に受け入れてはくれんでしょうから、帰国した暁には、私自身が率先垂範してやってみせます」

「ワタナベ、あなたは常々言っているわね、宗教には三つの発展段階があると。たしか…」

と言って夫人は首をかしげた。

海旭は微笑みと共に応じた。「よくぞ覚えていただいて恐縮です。すなわち最初は教権宗教、それが哲理宗教へ、さらに社会宗教へ

と進む。今日は社会宗教の時代に入った、と」
「そうになると、さしずめ私は哲理宗教の学者
というわけかね」珍しく温厚なロイマン教授
がいささか棘を含んだ口調で言った。「そし
てヲギハラも」

海旭は慌てて言い直した。「ロイマン先生、
私は三つの段階について、宗教としての価値
が上とか下とか言っているではありません。
宗教を哲理としてとらえて研究される先生の
お仕事は、そしてヲギハラの仕事もとても重
要で、私の遠く及ぶところではありません。
いっぽうで今日必要とされている社会宗教に
も私は真摯に向き合いたいということなので
す」

「ワタナベは両方やればいいのではないです
か」夫人は大きく頷いた。「哲理宗教も社会
宗教も。うちの主人やヲギハラと違って、両
立がワタナベの流儀なのよ。どちらか一つに
したらワタナベのいいところが死んでしまう。
ワタナベなら両方を手に入れられる。博士号

も慈善事業の勉強も」

学問か社会かどちらをとるかではなく、学
問も社会も両方をとる——思えば、これが海
旭の生涯にわたるテーマとなるが、そう得心
するのは帰国してからであった。この時は、
ロイマン夫人に背中を押されて、「両立」で
いいのだと吹っ切れたことが大きかった。こ
れで博士号の勉強にも、気持ちをとり直して
かれそうだった。

しかしそれをくじく出来事が突然訪れる。
その年の初秋、母親トナの死である。

(この項つづく)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会



●財布

〔特選〕暮れの町すぐにふくらむ小銭入れ

増田 信子

新年を迎えるための買い物に出かける。買うたびに小銭まで数えて出すという、手間のかかることはやっておれない。買い物が増えるに従って小銭入れはふくらんでくる。歳末の主婦の様子がまざまざと見える。

〔佳作〕

印傳の黒革財布秋の風

森 懐人

財布から見知らぬ名刺猫柳

小林 明彦

盆僧の浄財入れる布財布

浜口 佳春

●鍵

〔特選〕回廊に鍵束の音春兆す

鳥羽 梓

どういう建物かの説明がないから、読み手が勝手に決めればよい。閉ざすのか開くのかも。上の句「に」は「を」とすると動きが出

てくるが、さてどうだろう。助詞一つで句は随分変わるものである。

〈佳作〉

庫裡裏の鍵穴さがす梅月夜

金子 ミサ子

春の闇鍵のかたちをたしかめる

山口 島人

鍵錆びて倉庫の蔭の凍て厳し

石原 新

●自由題

〈特選〉

鈴の音 鈴に籠りて梅は二分

工藤

掉

鈴の音が籠るというのはポケットに入れているのだろうか。あるいは手に握っているのか。梅を見に来て車を降り、鍵をポケットに入れて歩いている。そんなところだろうか。「鈴に籠りて」のとらえ方が成功している。

〈佳作〉

鳥曇り運河を渡る無蓋貨車

浜野 東彦

初明かり波に波打つ国府の浜

井村 善也

懐手一句成るまで解かず居り

池田 伊吹



誌上句会〈編集部選〉

■財布

風花やゴムで吊り上ぐ籠財布
財布手に子の足軽し春祭り
腹巻の財布や冬の紐育
生焼けの財布がひとつ今朝の火事
実印が財布の中で冷えており
財布から一円玉と桜貝
着膨れて財布の位置を確かめる
ちいさめの財布のような桜烏賊

金子ミサ子
佐藤雅子
斉田 仁
西原規夫
工藤 掉
天地幸則
長谷川 裕
袖岡志野

■鍵

合鍵をしまい忘れて年を越し
わが人生鍵を外せば臆なる

森 懷人
佐藤雅子

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇一五年四月二十日

発表・『浄土』二〇一五年六月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-17-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

友の忌や帰ろう鍵をかけぬ村
合鍵で合鍵作り春近し
鍵穴のかたちに芽吹きはじめおり
鍵盤にしろしをつけて春を待つ

盆梅の裏にぐしゃりと鍵の東
鍵穴の奥に芽吹きありにけり

立花貞花
工藤 掉
小林苑を
大森 葉
内藤隼人
由紀智彦

■自由題

春未だ菰をかぶりて冬ばたん
八十路ゆくわれを慰む冬薔薇
寒行長靴履きし法の聲
大の字に寝て如月の耳を干す
浅き春毎日変える爪の色
東京に雪降る夜のシベリウス
すでに雪しどろもどろになりけり
しゃぼん玉猫の言葉のように飛び
退屈な春の海鼠の太さかな
春日傘たたみて少しふらつきぬ
粉雪を食べ物として手にのせる
錠剤の色それぞれや日脚伸ぶ

森 懷人
佐藤雅子
飯島英徳
内藤隼人
立花貞花
長谷川 裕
小山内弘道
袖岡志野
光山弘道
斉田 仁
柏木せつこ
吉崎美和子

時計 動画 自由題

さっちゃんねネッ

かまちのりろう



水温む子犬も足をのびしけり

岱潤

的哲学ではないはずです。

そして法然上人もこの救いという点に、

先号の「後記」で、「悪いことをしたら地獄に堕ちるなどという脅しは、輪廻を否定したお釈迦様の教えに反する」ということを書いたところ、「あなたはお釈迦様が輪廻がないと言っていると言うのか」と怒られてしまった。

確かに「輪廻がない」とは言っていない。しかし輪廻から脱しなければ救いがないと言っているのではないだろうか。怒られた方は、仏教がな

んのために説かれた教えなのか勘違いされているように思われます。あくまでも人々を救うための教えであって、観念論

掘り当てたりもしています。しかしそんな話は眉唾だと言って、誰に対しても死後の往生しか説かない布教師さんがいますが、私にはその方が法然上人を歪曲化しているように思えてなりません。法然

上人はもつと目の前の人に合わせた法話をされていたのではないのでしょうか。それはお弟子に対する、それぞれのお話を見ても明らかです。その人の特性を見切っていたのです。(長)

編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十一巻四月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十七年三月二十日

発行 平成二十七年四月一日

発行人

編集人

印刷所

〒一〇五・〇〇一一

東京部港区芝公園四七四明照会館四階

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・六九四七

振替 〇〇一八・〇八・八二八七

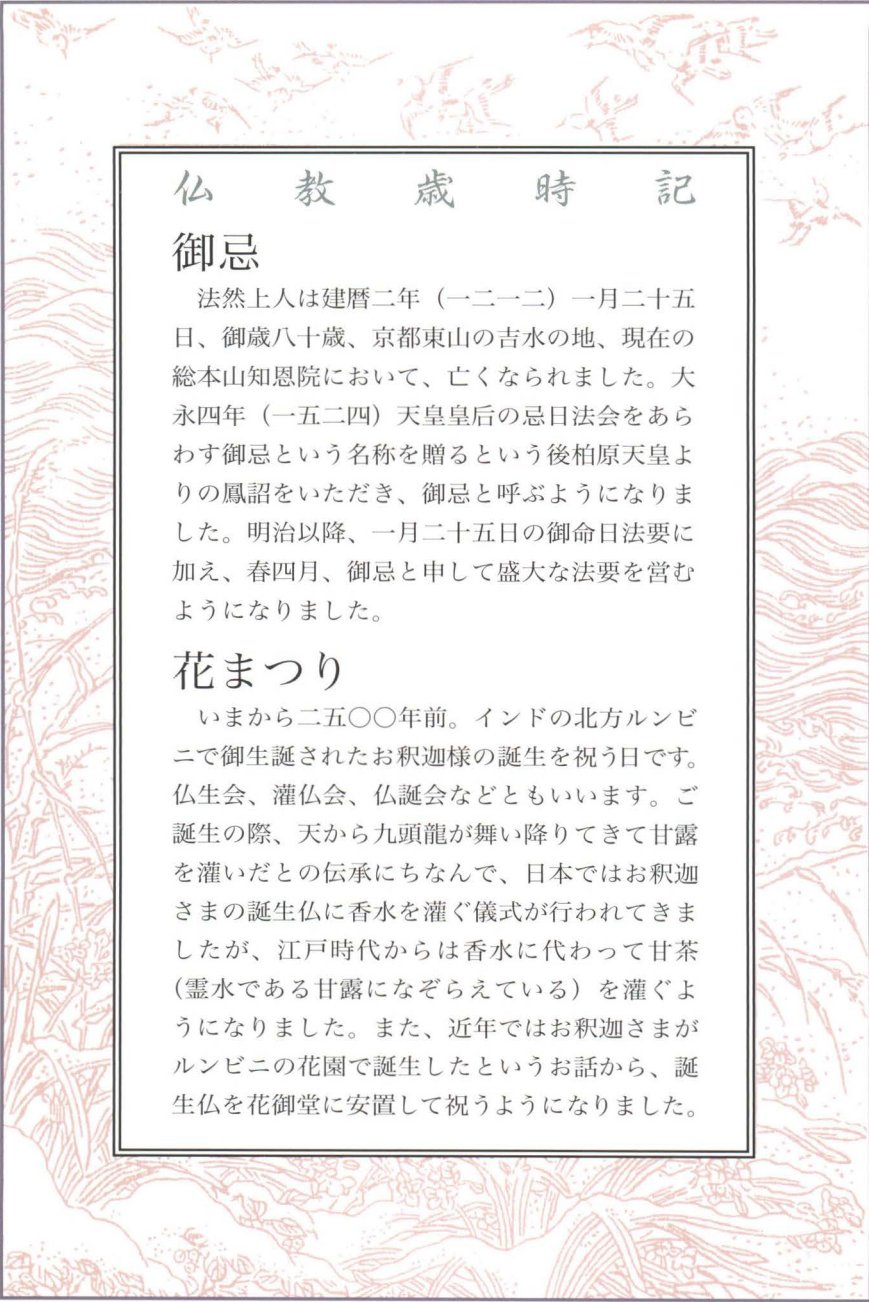
雑誌『浄土』

特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田紘義(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森厳寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山清浄華院)
脇博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp



仏教歳時記 御忌

法然上人は建暦二年（一二一二）一月二十五日、御歳八十歳、京都東山の吉水の地、現在の総本山知恩院において、亡くなられました。大永四年（一五二四）天皇皇后の忌日法会をあらわす御忌という名称を贈るという後柏原天皇よりの鳳詔をいただき、御忌と呼ぶようになりました。明治以降、一月二十五日の御命日法要に加え、春四月、御忌と申して盛大な法要を営むようになりました。

花まつり

いまから二五〇〇年前。インドの北方ルンビニで御生誕されたお釈迦様の誕生を祝う日です。仏生会、灌仏会、仏誕会などともいいます。ご誕生の際、天から九頭龍が舞い降りてきて甘露を灌いだとの伝承にちなんで、日本ではお釈迦さまの誕生仏に香水を灌ぐ儀式が行われてきましたが、江戸時代からは香水に代わって甘茶（霊水である甘露になぞらえている）を灌ぐようになりました。また、近年ではお釈迦さまがルンビニの花園で誕生したというお話から、誕生仏を花御堂に安置して祝うようになりました。

石丸晶子先生の

本誌連載小説『法然上人を巡る人々』が
文庫本となりました。

ほとけの
慈悲は
いつの世にも、
誰のもとにも



法然。その光に出逢い、闇をこえ、
“あたらしいのち” に生きた
貴族、武士、庶民たちの物語

月影の使者 上 下

●浄土宗出版 上下巻とも本体730円＋税

〔問合せ・お求め〕 浄土宗出版

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4

TEL: 03-3436-3700 FAX: 03-5472-4878 <http://press.jodo.or.jp/>